

## 編集後記

生成系 AI の時代になり、知識の収集と要約は、もはや特別な力でも学問でもありません。Google が過去の知識を民主化してきたように、生成系 AI は学問とされていた多くの領域を民主化します。このような知の民主化が進んだとき、現在の、我々の脳に限られた、過去の知識量に委ねる仕事の仕組みは、大きく変革されるでしょう。知識の再構築の仕事は、もはや特別な仕事ではなくなり、全ての人に開放されます。

医師の研究面にも大きな変革が訪れます。まず、過去の結果を、ただまとめる仕事は意味を失っていくでしょう。また、大規模データを用いたインシリコ解析も AI が取り扱う未来が待っています。しかし、AI は、誰かが蓄積したデータを元に、それを再構築することしか出来ません。目の前の症例から、何を学び取り、何をデータとするか、その最前線は、我々の仕事です。新しさに、知的興奮を味わうことも、AI にはできないでしょう。

我々の仕事の多くは、知識の再構築です。しかし、病態は、医学の進歩に従って、進化します。その時代に即した症例報告は、再構築を超えて、新しいものを見つけ出す仕事です。それには困難が伴います。生成系 AI の時代は、知識の再構築は AI に任せ、真に新しい、誰も知らない、

この困難な領域に力を注ぎ、新しい知の繋がりや発見に力を注ぐことが出来ます。そのためには、一見愚かに見えることでも、考え続ける姿勢が求められます。

そのような仕事には、マニュアルはありません。挑戦し続ける心が必要です。挑戦し続ける心には、経験と知識を背景とする聡明さは時として邪魔をします。聡明さと挑戦する心は、共存が難しい資質です。しかし、医学には、この挑戦し続ける聡明な資質が必要です。

これからの時代は、生成系 AI を駆使した次元の異なった聡明さを持ちつつ、未知の領域への挑戦をすることが求められます。その過程でも、我々は失敗し、学び、理解を深めていくでしょう。それが医学の姿であり、明日の医学の源泉です。

生成系 AI を駆使するためには、質問力が重要です。いい質問のためには、何が解らないかを解る必要があります。これは難しいことです。論文を書く行為とは、何が解らないかを明確にするという行為です。この行為無くしては、我々は成長することは出来ません。

装いの新しくなった臨床神経学が、生成系 AI 時代も、皆さんの解らない事を問う場となることを願っています。  
(小野寺理)

## 〈編集委員〉

編集委員長	小野寺 理	編集副委員長	三澤 園子		
編集幹事	石浦 浩之	漆谷 真	杉江 和馬		
編集委員	今井 富裕	木下 真幸子	古賀 政利	櫻井 圭太	柴田 護
下畑 享良	鈴木 匡子	辻野 彰	坪井 義夫	中嶋 秀人	新野 正明

「臨床神経学」	第64巻 第1号	2024年1月1日発行	
編集者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		一般社団法人日本神経学会
発行者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		西山 和利
印刷所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入		中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル  
日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>